

5月30日（水） 四谷駅前「プラザエフ」へお集まり下さい。

認知症の人に精神老健はいらない

入院の必要のない認知症ケアで穏やかな地域生活を

認知症高齢者の精神病院への入院が増加しています。しかし、居住先と支援体制が整備されれば、多くの人は退院できるのです。「社会的入院」が、ふたたび認知症高齢者の中で繰り返されようとしています。

本来、認知症の人にとって、精神病院は適切なケア環境にあるとはいえません。生活上の制約が多く、その管理的療養環境がBPSDを悪化させ、過剰な薬剤投与、拘束という悪循環も見られ、長期入院という状態を引き起こしているからです。

WHOは、この4月に発表した「認知症に関する報告書」の中で、日本の介護保険を高く評価しながらも、「多くの認知症患者が入院していることは問題」と批判しました。

しかるに、日本精神病院協会は、入院者の減少対策として、精神病院の「精神保健老人保健施設」への転換、グループホームへの参入を提起しています。これらの動きは「形を変えた精神病院入院」であり、名前が変わっても、医師を頂点とした管理的治療、長期収容の繰り返しに繋がるものであり、私たちはどうも容認することはできません。

このシンポジウムは、認知症高齢者の精神病院入院の弊害を具体的に指摘し、認知症に関する啓発活動の重要性、訪問診療による認知症診療の効果、医療・介護スタッフの在り方などを明らかにします。そして、認知症の人が地域で穏やかに生活を送るため、どのような施策を構築していくべきかについて、実践に立った提言を行います。

さらに、この提言を受けて、主要政党の代表の皆さんのご意見を伺い、これを実効ある政策に結びつけていきたいと思えます。

認知症ケアは21世紀最大のテーマのひとつです。しかし、その具体的展開は大きく立ち遅れています。いま、医療も介護も、いや政治も社会も、認知症ケアの確立に大きく踏み出すことが求められています。

このシンポジウムがその第一歩となるよう、多くの方々の参加を呼びかけます。

